

自由なき世界（下）

◇目次

第5章 真実か嘘か（二〇一五年） 1

第6章 平等か寡頭^{オリガーク}政治か（二〇一六年） 85

エピローグ（二〇一一年） 171

謝辞 177

訳者あとがき 181

下巻原註 18

索引 1

上巻目次

プロローグ（二〇一〇年）

第1章 個人主義か全体主義か（二〇一一年）

第2章 継承か破綻か（二〇一二年）

第3章 統合か帝国か（二〇一三年）

第4章 新しさか永遠か（二〇一四年）

上巻原註

第5章 真実か嘘か（二〇一五年）

人は欺かれると物と化す。

——ミハイル・バフチン、一九四三年

あけがたの黒いミルク 僕はそれを夕方に飲む
僕はそれを昼に朝に飲む 僕はそれを夜中に飲む
僕は飲む そしてまた飲む
僕は宙に墓を掘る そこなら寝るのに狭くない

——パウル・ツェラン、一九四四年

「永遠の政治」に一番乗りしたのはロシアだった。泥棒政治クレプトクラシーによって「継承」「統合」「新しさ」といった美德がありえないものになったので、次は政治の作り話によって、こうした美德を考えもつかないものにする必要があったのだ。

イヴァン・イリインの思想が永遠の政治に具体的なかたちを与えた。自分たちは無垢なんだという嘘にとっぷり浸れば、ロシア民族は盲目的な自己愛を身につけることができるだろう。プーチンの懐刀でプロバガンダの達人ウラジスラフ・スルコフは、「永遠」が現代のメディアをいかに活き活きとさせるかを教えてみせた。スルコフは二〇〇九年に小説『オールモスト・ゼロ』

を発表したが、これは一種の政治的告白だった。この物語のなかでは、真実なのはただ一つ、私たちが嘘を必要としていることで、自由になる道はただ一つ、私たちがそれを受け入れることだった。この小説のなかのエピソードとして、主人公が、ひたすら眠り続けるルームメイトに悩まされるくだりがある。専門家が報告書を提出する。「彼が目を開けたとたん、私たちは皆、消えてなくなるでしょう」とその専門家はこっそりと打ち明ける。「この社会がなすべきこと、とりわけあなたがなすべきことは、彼に夢を見続けさせることなのです」。スルコフは、夢を見ている状態を永遠に維持させることが自分の仕事だと解説したのだ。真実など何もないことがただ一つの真実であるならば、嘘つきこそがロシアの崇高な僕^{しもべ}となりうるのだ^{*1}。

「事実の存在」を否定するところから永遠が始まる。国民が万事を疑いだしたなら、国境の向こうに範となるものがあっても目に入らないし、改革について分別ある議論もできず、政治を変えするために組織をつくるほどには互いを信頼できなくなる。未来を一見もつともらしく見せるためには、現時点での事実も必要だ。そこでスルコフは、イリインに倣^{なま}って「全体の凝視」という觀念を持ちだし、それによって「地政学的な現実」の姿が見えてくると主張した。その姿とは、諸外国が頻繁に攻撃を仕掛けてきて、ロシアを本来の無垢の状態から引きはがそうとしている、というものだ。ロシア人は無知であるがゆえに愛すべき存在なので、彼らを愛するためには彼らとことん無知にするほかない。未来に待つのは、さらなる遠い未来についての、さらなる無知だけだ。『オールモスト・ゼロ』のなかでスルコフが記しているように、「知れば知識を持てるだけだが、不確かだからこそ希望が持てる」のだ^{*2}。

先達のイリインのように、スルコフもまたキリスト教を、自らの創造した至高の世界への入り口と考えていた。スルコフの神とは、世を捨てた無力な相棒、背中を叩いて励ますべき仲間である創造主だ。イリインがしたように、スルコフもおなじみの聖書の一節を持ちだして、その意味をひっくり返した。スルコフが自身の小説に登場させた一人の尼僧は、「コリントの信徒への手紙一」の一三章一三節を引いてこう語る。「先のこと何かわからないから希望が持てるのです。信仰が、そして愛が」。危機を繰り返してつちあげ、国民をつねに先行き不安な状態にしておけば、彼らの感情を管理して意のままに操れる。これではスルコフが援用した聖書のくだりとは正反対の意味になる。本来の意味では、希望、信仰、そして愛こそが、この世界をありのままに見ることができるようになるにつれて、私たちの前にはつきりとした姿を現す三位一体の美德だった。このくだりの直前には、他者の視点から見ることとを人の成長ととらえる有名な一節がある。「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映つたものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はつきり知られているようにとはつきり知ることになる」。他者の目から見て最初に理解するのは、自分たちが無垢ではないということだ。スルコフは鏡をおぼろに映るままにしておくつもりだった。

二〇一〇年代のロシアにおいて、おぼろに映す鏡とはテレビ画面だった。ロシア人の九割は、ニュースを知るのにもっぱらテレビを頼りにした。スルコフはこの国の最も有力なテレビ局「チャンネル1」で広報部門を率いたのち、ボリス・エリツィンとウラジーミル・プーチンのメディア担当責任者になった。そしてロシアのテレビが、さまざまな利害を代表する真の複数制から、

映像は変われども伝えたいことは同じという、偽りの複数制へと切り替わる指揮をとった。二〇一〇年代の半ばには、チャンネル1の国家予算は年間およそ八億五〇〇〇万ドルにのぼった。このテレビ局の社員や他のロシアの国営ネットワークの社員は、権力は現実存在するが、この世界ののもろもろの事実はそのうちではないのだと教わった。ロシアの通信副大臣アレクセイ・ヴォーリンは、彼らが昇進する道のりをこう説明する。「彼らは黒幕のために働くことになる。この黒幕が彼らに何を書くか、何を書いてはいけないか、あれやこれやをどう書くべきかを教えるのだ。黒幕にはそうする権利があるのだが、それはこの男が彼らに給料を払っているからだ」。事実であるかどうかには制約されなかった。花形の政治テクノロジストのグレブ・パフロフスキーはこう説明する。「何を言ってもかまわない。現実とやらをこしらえるのだ」。国際的なニュースが、その地域のニュースや地元ネタに取って代わり、後者はテレビからほぼ姿を消した。国際報道とは、西側の腐敗や偽善、敵意を毎日延々と流しつづける、というものだ。ヨーロッパやアメリカには見習う価値のあるものなど何もない。真の変化など起こりえない——これこそが伝えたいことだった。

外国の視聴者に向けたロシアのプロパガンダ用テレビ局「RT」でも、目的は同じだった。人々を行動に駆り立てかねない情報をもみ消し、彼らをなだめすかして何もさせないようにするのだ。食い違いを粉飾して澄まし顔で吞みこんで、RTはニュースの報道のしかたを墮落させた——食い違いの粉飾とは、たとえば、ホロコースト否定論者を招き入れて人権活動家と紹介して話をさせたり、ネオナチのゲストを中東の専門家だと説明したりするのだ。ウラジーミル・プー

チンに言わせれば、RTは「政府が資金を出しているから、ロシア政府の公式の立場を代弁するほかない」。この立場には現実の世界が欠けていたが、このテレビ局への資金助成は年間およそ四億ドルにのぼった。アメリカやヨーロッパの人々は、このチャンネルが、自分たちの国の指導者の誠実さや自国のメディアの活力に抱いている疑念——ときにはじゅうぶん納得できるものもあるのだが——の拡声器であると気がついた。RTのスローガンになっている「まだ質問が^{クエスチオン}ありますよ」は、いっそうの不確かな状態を求める気分をおおった。RTが放送する内容が事実かどうかを問うことには意味がなかった。このテレビ局が放送するのは、事実の否定だからだ。この局のディレクターが語るところでは、「客観的な報道なんてものは存在しないさ」。RTはこう伝えたいのだ——すべてのメディアは嘘をついているが、RTは本当のことを言っているふりをしないだけ、まだ正直なのだ^{モイ}と。

事実かどうかは訳知り顔の冷笑によってうやむやにされ、視聴者に求められるのは、ただ眠りに落ちる前にとどころ頷くことだけだった^{モイ}。

「情報戦が今や戦争の主流だ」。ドミトリー・キセリョフはなんでも知ることのできる立場にいた。キセリョフはロシア国営のメディア複合企業「ロシア・セヴォードニヤ」（ロシアの今日）のトップで、チャンネル1の日曜夜の人気報道番組『ヴェステイ・ニデーリ』（今週のニュース）のキャスターも務めていたが、この番組はウクライナに対する情報戦の攻撃の先頭に立っていた^{モイ}。

クレムリンが、ロシアによる侵攻の先鋒として最初にウクライナに送りこんだのは、政治テクノロジストたちだった。スルコフが指揮をとるのは、非現実の世界で戦われる戦争である。二〇一四年の二月にスルコフはクリミアとキエフに赴き、その後はプーチンの下でウクライナ問題を担当する大統領補佐官を務めた。またロシアの政治テクノロジストのアレクサンドル・ボロダイは、ロシアによるクリミア併合のさなかにクリミアの報道官を務めた。二〇一四年の夏にウクライナ南東部に新たにつくられた二つの「人民共和国」の「首相」を名乗ったのは、ロシアのメディア担当責任者たちだった。^{*7}

ロシアによるウクライナ南部、さらには南東部への侵攻は、軍事的に見れば控えめなものだが、じつは戦争史上、最も高度なプロパガンダ作戦が行われていた。このプロパガンダは二段階で機能した。第一段階とは、事実の存在そのものを直接攻撃することで一目瞭然のことも否定するというものだったが、戦争があることさえ否定した。第二段階とは、無条件にロシアは無垢である^{ナチスドイツが}と宣言し、ロシアはいかなる過ちにも責任がないと言い張ることだった。戦争など起きていなかったのだし、ロシアは徹底して正当化された。

二〇一四年二月二四日にロシアがウクライナへの侵攻を開始すると、プーチン大統領はしらっとして嘘をついた。二月二八日に、「我々は、サーベルをがちやつかせたり、クリミアに軍隊を送るつもりなどない」と宣言したのだ。ところがプーチンはすでにクリミアに部隊を送っていた。プーチンがこの発言をしたときには、ロシア軍は四日間^{ナチスドイツが}にわたってウクライナが主権を有する領土を進軍していた。ついでに言えば「夜の狼」もクリミアにいた。エンジンをふかし大音量

をあげてロシア兵たちのあとをついてまわったのだが、これはロシアの存在を紛うかたなきものにするメディア向けの派手な宣伝になった。そこまでいっても、プーチンは、基本的な事実に基づいた記者たちのことは小馬鹿にすることにした。三月四日にプーチンは、ロシア兵に見えたのはウクライナの現地住民で、彼らは地元のお店でロシア軍の制服を買って着ていたのだと白を切った。「ソ連崩壊後の元構成国を覗いてみてごらん」と、プーチンがとぼけて言う。「あそこには似ている制服が山ほどある。店に行けばどんな制服だって買えるのさ」^{*8}。

プーチンは旧ソ連圏のどこに対しても、ロシアがウクライナに侵攻していいことを納得させる努力はしなかった。実際、自分の嘘をウクライナの指導層が信じないのも当然だと思っていた。ウクライナの暫定政府は自国がロシアから攻撃を受けているとわかっていたし、だからこそ武力で反撃したりせず、国際社会に対応を求めたのだ。キエフの指導者たちがプーチンの言葉を真に受けていたならば、必ずや抵抗するよう命じていたにちがいない。プーチンの狙いはウクライナを騙すことではなく、ロシアの自国民と結託して知らぬ存ぜぬをおし通すことにあった。国民はプーチンが嘘をついているとわかっていても、彼の言うことを信じるものとされていた。報道記者のチャールズ・クロウヴァーは、レフ・グミリョフについての研究書でこう述べている。「プーチンの推測は結局正しかったのだが、嘘をつく方が、ロシアの政治階級を分裂させるのではなくむしろ結束させるのだ。嘘が途方もなく明々白々なものであるほど、臣下たちはその嘘を受け入れることで忠誠心を示そうと逸り、クレムリン権力の巨大で聖なる神秘に進んで加わりとうする」^{*9}。

プーチンが事実の存在を真つ向から攻撃するやり方は、「もつともらしい反証」の逆で「もつとももらしさのない反証」とでも呼べるものだ^{*10}。〔著者註…これより古くからある「もつともらしい」反証というものは、一九八〇年代のアメリカで生まれた発想で、これは人種差別だと非難されずにすむような曖昧なやり方で主張を行うことだ。この手法を共和党の政治戦略家のリー・アトウォーター（一九五一年—一九九一年）が次のように表現したのは記憶に残る。〕「ブラウン判決の下った年の」一九五四年に「ニガー、ニガー、ニガー」とはやし立てたのが出発点としても、「キング牧師の暗殺された」一九六八年になると、もう「ニガー」とは口でできなくなった——そんなことをすると困った目に遭う。やぶへびになるんだ。だから強制的なパス通学とか、州権とかそんなたわけたことを言うようになった。今ではえらく抽象的になったから、滅税の話をしてるわけさ。口にすることといえどもつばら経済の話だが、その思いがけない副産物として黒人の方が白人よりも痛い目を見ているのさ」。こんなふうに話した者が人種差別を責められても、自分はとくに黒人について話していたわけではないと、もつともらしく答えることができたのだ」。プーチンは衆知の事実を否定することで、国内では国を一つにまとめる作り話をこしらえ、ヨーロッパやアメリカのニュースデスクには苦しいジレンマをもたらした。西側のジャーナリストは事実を報道するよう教わっていたし、三月四日にもなると、ロシアがウクライナに侵攻したことを示す事実に基づく証拠が圧倒的だった。ロシアとウクライナのジャーナリストは、ロシア兵がクリミアを行進する様子を撮影している。ウクライナの人々は、一足先にロシアの特殊部隊を「異星人^{リトルグリーンメン}」と呼んで、記事のない制服をまとった兵士たちは、おそらく地球外からやってきたにちがいないとのジョークを飛ばした。兵士たちはウクライナ語を話せなかった。地元のウクライナ人たちは、ロシアのいろいろな都市

に特有で、地元ウクライナでは使わないロシア語のスラングを兵士たちが話すことにもすぐに気がついた。報道記者のエカテリーナ・セルガツコーヴァは、「この『異星^{リトルグリーンマン}人』たちは、自分たちがロシアから来たことを隠そうともしない」と指摘した。^{*11}

とはいえ西側のジャーナリストたちは、事実のさまざまな解釈を報道するようにとも教わっている。しかし「どんな話にも表と裏がある」との格言が当てはまるのは、どちらの側を代表する者も、この世界に事実が存在することを認めて、同じ一連の事実を解釈する場合にかぎったことだ。「もっともらしさのない反証」というプーチンの戦略は、この従来の考えにつけこんで、その前提を破壊するものだった。話の片側に身を寄せてみせながら、事実の存在を小馬鹿にしたのだ。「私はあなたにおおつびらに嘘をついていて、そのことを私たちのどちらも知っている」というのでは、話のどちらかの側にいることにさえならない。それは異な^{*12}のだ。

二〇一四年の二月末から三月初めにかけての数日間にロシアによる侵攻の報告が入っていたにもかかわらず、西側の編集者たちはプーチンの饒舌な否定の方を採用することにした。こうしてロシアによるウクライナ侵攻の物語は、一見気づきにくい根底から変化してしまった。報じられるのが、ウクライナで今現実に行き起きていることではなく、ロシアの大統領がウクライナについてこう語ると決めた話になったのだ。現実の戦争がテレビのリアリティ・ショーと化し、そこではプーチンがヒーローだった。新聞雑誌の多くが、このドラマの脇役に甘んじた。西側の編集者たちはしだいに鋭い目を向けはじめたが、その批判もクレムリンの言い分に疑いをもつところまで止まっていた。ロシアが実際にウクライナに侵攻していたことをあとからプーチンが認めて

も、だからといって西側の新聞雑誌がブーチンのショーで一役買っていたことがはっきりしただけだった。

「もっともらしさのない反証」に続くロシアの第二のプロパガンダ戦略は、自国の無垢を宣言することだ。よって、この侵攻は、弱小隣国がとことん無防備になった瞬間に強国が攻めこんだ、というものではなく、抑圧された人々が強大な世界的陰謀に対して起こした正義の反乱と理解されるべきだ。三月四日にブーチンは次のように語った。「ときおりこんな感じがするんだが、大きな水たまりの大西洋を越えてアメリカにゆくと、人々が、自分たちをしていることがどんな結果を招くのか本当はさっぱりわかっていないのに、実験室にこもってまるでラットでも使っているように実験をしている、とね」。そうだ、戦争など起きていないし、たとえ起きているとしても、非はアメリカにある。そしてアメリカは超大国だから、そのやりたい放題の悪だくみに對抗するには、どんなことをしても許されるのだ。たとえロシアが侵攻していたとしても、まあそうしているとしてもいいないとも言えるのだが、ロシアが何をしようがしまいが、この国が正しいのはどのみち明らかになることだ……^{*13}。

この侵攻のさいに選んだ戦術は、無垢を訴えるこの戦略に役立った。たしかにロシア兵の制服に記章がなく、ロシア軍の武器や装甲、装備や車両に何の徽しるしもないからといって、ウクライナの誰をも納得させることはできなかった。とはいえ真の狙いは、勇敢な現地住民がアメリカという超大国に異例の手段で立ち向かう、テレビドラマさながらの空気をつくることにあった。この不条理劇をロシア国民は信じるよう期待された——テレビ画面で見る兵士たちは自国ロシアの軍隊

などではなく、ウクライナの血気盛んな反逆者の寄せ集めで、彼らは測り知れない力を持つアメリカが後押しするナチス政権から自国ウクライナの民の名誉を守ろうとしているのだ。記章がないのは、証拠になるならないでそうしているのでなく、むしろロシアの視聴者が筋書きを追うためのヒントにすぎなかった。事実として納得させるのではなく、彼らを物語のなかに誘うことが目的なのだ。^{*14}

この大芝居のために地元のパルチザンのふりをした本物の兵士たちは、よってパルチザンの戦術を使うことができ、そのせいで本物の民間人を危険に晒すことになる。これは「逆非対称」とも呼べる戦争の一戦術だ。普通は「非対称戦」とは、パルチザンの兵士やテロリスト集団が、自分たちより強い正規軍と戦うさいに、型破りの戦術を用いることだ。ところがロシアによる侵略の場合、強者が弱者のふりをするために、弱者の武器——パルチザンやテロリストの戦術——を用いた。ただでさえ違法である侵略のさなかに、ロシア軍は、端から故意に戦争の基本的な法すら破っていた。ロシアによる侵略を否定しつつも、プーチンはこの戦闘のしかたを承認した。三月四日にプーチンは、ロシア兵が民間人のなかに隠れることを予言した。「あの「ウクライナの」部隊が自国民を撃とうとするのを見がいい。我々はその後ろにいるのだ——前ではなく後ろにだ。連中の好きなように女子どもを撃たせてやるがいい！」^{*15}

二〇一四年の三月、クリミアをめぐる戦いはロシアがあっけなく勝利した。その後、ロシアに

よるウクライナ南東部への介入が続いた。この第二の戦いにおいても、「もつともらし^{インブロージブル}さのない反証」によつて、またもロシア国民の忠誠とジャーナリストの勇氣が試され、「逆非対称戦」によつて、またも違法な戦争が犠牲者の頭のまわりの光輪^{アウレオラ}のなかに隠されてしまった。

この二つの戦術によつて永遠の政治が現実のものとなつたし、永遠の政治においては他国の敵意と正当な抵抗のほかは何も起きていないとの主張に吞まれて、事実がどうかなど消滅してしまう。プーチンはスルコフの助けを借りて、ロシア国民を、この国がこれまでつねにやってきたように自己防衛を続けるという永遠のサイクルに導いたのだ。

永遠とは、過去からいくつかの瞬間を取りだし、それらを正義の瞬間として描きだし、そのあいの時間をなかつたものとして捨て去ることだ。この戦争でロシアの指導部は、すでにこうした二つの瞬間について触れていた——一つは九八八年のヴォロディーミル（ヴァルデマー）のキリスト教への改宗で、これによつてウクライナとロシアは未来永劫一つの国家になつたとされた。そして今一つは、一九四一年のドイツによるソ連への侵攻で、これがあつたことによつてウクライナの今回の抗議運動はどういうわけかファシストによる脅威と見なされるようになった。二〇一四年四月、ウクライナ南東部まで介入を広げることを正当化するために、プーチンは三度過去^{みたび}に言及することにした。今度は一七七四年だった。この年、ロシア帝国がオスマン帝国を破つて黒海北岸の領土を併合し、その一部は現在ウクライナの領土になっている。これらの土地は一八世紀には「ノヴォロシア」（ニュー・ロシア）と呼ばれていた。プーチンはこの言葉を持ちだすことで、現在のロシアとウクライナをひとまず脇に置いて、話を古^{いにしえ}の時代の権利にすり替えた。

「ノヴォロシア」の理屈で言えば、ウクライナは侵略者だった。ウクライナには、かつてはロシアのものと呼ばれ、ゆえに永遠にロシアのものである土地が含まれているからだ。斬新な発想の転換によって、ロシアも第三者の国々も、現在の退屈な事実を忘れることができた——例を挙げれば、ロシア連邦とウクライナが共存してきたこの二二年間、モスクワはロシア系ウクライナ人の扱いについて、ただの一度も正式に不満を表明したことなどなかったという事実があった。^{*16}

ロシア連邦の国民の大半は、二〇一四年の三月、四月になるまで——このときはじめてスルコフとドゥーギンがこれを喧伝し、その後プーチンがこれを政策にしたのだが——「ノヴォロシア」という言葉がこの意味で使われるのを聞いたことがなかった。一八世紀のロシア帝国の領土は、プーチンや、のちにロシアのメデヴィアが定めた地域——すなわちクリミア、ドネツク、ルハンシク、ハルキウ、ドニエプロペトロフスク（ドニプロペトロウシク）、ザポリージャ、マイコラーイウ、オデッサ、そしてヘルソンといったウクライナの九つの州——とは異なっていた。また歴史的な解釈からすれば、この言葉にはプーチンにとって予想外の意味もあった。女帝エカテリーナは、イギリス帝国の植民地開拓者がたとえば「ニュー・イングランド」とか「ニュー・サウス・ウェールズ」といった言葉を使ったのと同じように、この「ニュー・ロシア」という言葉を使っていた。帝国時代には、入植者以外の人間の住む地域は、植民地という観点からすれば「新しい^{ニユイ}」ものだった。「新しい^{ニユイ}」とは、その地域がまだ帝国には属していないことを意味する。こうした土地は植民地大国の元にとどまるとはかぎらなかった。ニュー・イングランドもニュー・サウス・ウェールズも、今ではイギリスの一部ではないのは、ニュー・ロシアがロシアの一

部ではないのと同じである。^{*17}

二〇一四年三月にウクライナ南東部でスルコフとグラジェフが反乱軍を組織しようとしたとき、ロシアのテレビ画面には「ノヴォロシア」の地図があふれていた。地図の示した広大な領土とは、ロシアがこれを手中にしたあかつきには、ウクライナを黒海の諸港と切り離し、占拠したロシアとは地続きでないクリミアを



ロシア連邦の領土と
つなげるものだった。^{*18}
三月にロシア軍は、
ウクライナと国境を
接したロシアの二つ
の州、ベルゴロドと
ロストフに集結した。
その目的は、基本的
に先の二月のモスク
ワによる計画と同じ
で、また一歩進んで
ウクライナの（前述
の九州からすでに既成
事実化したクリミアを
除いた）八つの州で
州庁舎を力ずくで奪
取し、建物内で信奉
者たちに独立を宣言



させ、ウクライナを内部から分裂させることにあった。

そういうわけで二〇一四年の春、ロシアの政治テクノロジストたちが、次なる任務にとりかかべくウクライナにやってきた。クリミアに続いてウクライナ南東部を、はるかに大胆な、ただしはるかに曖昧な理屈によって占領するのだ。アレクサンドル・ポロダイは、ロシアが資金提供する政党を任された。ポロダイの説明によれば、ウクライナに侵攻することで、「我々はロシアの世界規模の計画のために戦っている」。ポロダイの盟友のロシア軍参謀本部情報総局（GRU）の大佐イーゴリ・ギルキンは、ウクライナ南東部の軍事作戦を指揮することになった。二〇一四年の四月にギルキンは、スラヴァンスクの市街に姿を現した。モスクワは、ポロダイとギルキンが自分たちの手先であること、あるいは二人がウクライナに居ること、あるいはそのどちらも否定した。ウクライナの戦地に送られたギルキンの部下であるGRUの兵士たちにとって、それは愉快なことではなかったし、ついに我慢も限界に達した。四月一七日にスラヴァンスクで野戦本部を築いていたロシア兵は、自分たちを義勇兵だと語るロシアのプロパガンダを地元の人々が信じていることに苛立って言った。「おれたちはGRUの特殊部隊なんだぞ」^{*19}。

そうこうするあいだもウクライナの国は重圧に苦しんでいた——クリミアはすでにロシアに占拠され、南東部にもロシア兵たちがいた。革命のあとに高い期待を寄せる市民もいれば、それに反対する市民もいた。大統領選挙を計画する必要もあった。そんな体たらくだった。とはいえ、「ノヴォロシア」を掌握しようというロシアの計画は、夏までには頓挫した。三月から四月にかけてウクライナの州庁所在地でロシアが起こしたクーデターは、ほとんどが失敗に終わった。ロ

シア人と地元の共謀者がお定めりのごとく州庁舎の占拠を企てたが、さほどのことは起きなかった。たしかにこの南東部諸州のウクライナ市民は、おそらくウクライナ語ではなくロシア語を第一言語に挙げるだろうし、おそらく二〇一〇年にはヤヌコーヴィチに投票しただろうし、おそらくマイダンに出かけたりはしなかっただろう。だからといって彼らが、ロシアによる支配や国外からの軍事介入による政権交代を支持している、というわけではなかった。^{*20}

クリミアが併合されたあとの「ノヴォロシア」の作戦が成功したのは、八つの当該する州のうちルハンシクとドネツクのわずか二つで、しかもその一部にかぎられた。ドンバスとまとめて呼ばれるこの二州では石炭がとれるものの、ロシアは石炭を必要としていなかった。だが両州ともロシア連邦と国境を接しており、そのため地元のオリガルヒが土壇場で抵抗をためらった。ロシアは、その二州よりはるかに関心を寄せていた、ハルキウ、オデッサ、ドニプロペトロウシクといった州には足場を築けなかった。ハルキウとオデッサはロシア文化の中枢とみなす地域であったし、ドニプロペトロウシクは両国の共有する軍産複合体の中心地だった。ドニプロペトロウシクは、新しく知事になったイーホリ・コロモイスキーのもとで、ロシアの侵攻に対する抵抗運動の拠点になった。知事はロシア兵たちの首に賞金をかけた。建物にのぼって自撮りをしたがった一人のロシアの若者によって、ロシアの国旗がハルキウの空につかま掲げられたが、その日のうちにこの州庁舎はウクライナの手に戻った。オデッサでも、州庁舎を襲撃する最初の試みは失敗に終わった。^{*21}

三月から四月にかけてオデッサの住民は、ロシアによる侵攻に備えて動いていた。地元の名士